生田神社　下山手通１丁目

生田神社

祭神は稚日女尊（わかひるめのみこと）。旧生田区の村々の総鎮守。『日本書紀』によれば、神功（じんぐう）皇后が朝鮮出兵からの帰途、武庫の水門（みなと）で船が急に進まなくなり、その原因を占ったところ、「活田長狭（いくたながお）」に稚日女尊を祀ればよいという記述が見られる。それがこの生田神社だといわれている。言い伝えでは、もともと砂山（いさごやま）にあったが、洪水で流されてしまい、刀弥七太夫に背負われて現在の地に移されたという。また、生田神社は昔から松をきらうことで知られていた。これももともと砂(子)山にあったという言い伝えから来るもので、生田の神は砂(子)山に祀られていた時、山一面に松の木を茂らせていたのだが、洪水で流されそうになったとき、茂らせた松が全く役に立たなかったので、それ以来松を嫌うようになったというのである。そのことから、今でも生田神社は正月には「門松」を立てず、「杉飾り」を立てている。そして、今、境内の生田の森には松が一本も生えていないというのである。

生田の森

こうした伝説はともかく、生田神社は延喜式（えんぎしき）（927＜延長５＞年）という法律に記載のある神社、すなわち「式内社（しきないしゃ）」で、その当時からすでに存在していた神社ということになる。なお、大和政権時代このあたりを支配していた豪族、生田首（いくたのおびと）と何らかの関係があるのかもしれないが、詳しいことはわからない。また、生田神社は古くから朝廷の信仰が厚く、風雨や災害の時には勅使を奉

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

生田神社　下山手通１丁目

じて祈願することたびたびであった。朝鮮半島からの使者が来た時は、この神社で醸した酒を、敏馬（みぬめ）の浦でもてなしたという。

　ところで、806（大同 1）年、生田神社に 44 戸の神戸（かんべ）が与えられたというが、この神戸とは神社に租税を納める集落のことをいう。生田神社に接した神戸が神戸村となり、その村の海岸が幕末に神戸港として開港されたため、歴史的に古い名の「兵庫」をおさえて、「神戸」が市名となったのである。なお、「生田」の名は川沿いにあって稲の生育のよいことからつけられた田の美称だといわれている。

現在、本殿の奥に繁った森が、神社の神秘性を増しているが、もともとはこの神社から旧生田川のほとりまで森が及んでおり、「生田の森」と称された。この生田の森は古来から有名で、『枕草子』のなかにも「杜は生田…」と記されている。

えびらの梅

　境内には源平合戦の際、梶原景季が梅の枝を箙（矢を入れる道具）にさして奮戦したという「えびらの梅」や、平敦盛の遺児が父の墓所を訪れる途中で休息したという「子敦盛の萩」などもある。こうして、生田の森は、源平合戦の一ノ谷の戦いの戦場となったのはもとより、南北朝動乱期の湊川の戦いの戦場でもあり、また、花熊合戦の戦場ともなったのである。これも、生田川の背後にあった森林であったため、戦略上利用しやすいと考えられたからであろう。

　阪神・淡路大震災では本殿前の拝殿が押しつぶされ屋根が地面にたたきつけられた様子が映像を通じて全国へ流れ、地震による被害の大きさを多くの人々に伝えるに至った。生田神社では、2000（平成 12）年 1 月、本殿西側に「生田神社震災復興記念碑」を建立したが、震災の教訓から、単なる記念碑ではなく、碑の後方に池の水を利用できる防水ポンプを備え付けた。

場所：中央区下山手通 1-2-1

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著